

知の結節点としての図書館から研究データを発信する意義 — 東京大学附属図書館 U-PARL の試みを通じて —

永井正勝^{†1}

概要：東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）は2014年4月に東京大学附属図書館に設置された研究部門であり、第一期の5年間で、アジア研究図書館構築支援、アジア研究の実施、社会還元などの活動を行ってきた。そのような活動の一つに東京大学アジア研究図書館（2020年度開館予定）に配架予定の書籍を含めた研究資源のデジタル化がある。U-PARL が実施しているデジタル化の特色は、第一に、研究資源のデジタル公開を軸に、図書館が共有している「資源の外側にある書誌情報」と研究者が必要とする「資源の内側のデータ」とを繋ぎ、公開と利活用を行っている点にある。第二に、知の結節点としての地の利を生かして、分野を異にする研究者が協働を図る点にある。

キーワード：研究図書館、書誌情報、アノテーション、研究データ

The meaning of presenting research data from the library as a node of knowledge: Through the case of the Uehiro Project for the Asian Research Library (U-PARL)

MASAKATSU NAGAI^{†1}

1. はじめに

東京大学では2010年に始まる新図書館計画により、総合図書館の改革を進めている。その事業の一つに2020年度の開館が見込まれている東京大学アジア研究図書館（以下、アジア研究図書館）の新設がある。現在までのところ、東京大学では、30箇所（室）の図書館が附属図書館の組織の傘下に置かれている。それゆえ、31箇所目の図書館となるアジア研究図書館の新設は、東京大学の図書館数を増加させ、資料の分散を促進させることになり兼ねない。しかしながら、アジア研究図書館の新設の狙いは、図書館や研究資源の分散にあるのではなく、むしろ逆に、東京大学内に分散所蔵されているアジア関連の研究資源を集約させることを大きな目標としている。現在のところ、研究資源の完全な一元化を目指しているわけではないが、アジア関連資料を集約させ、研究者の利用に資することを通じて、アジア研究の世界的な拠点となることを目指し、開館の準備を進めているところである[1]。とはいうものの、新図書館計画ならびにアジア研究図書館の新設構想が浮上した当時、この構築を進める組織が具体化されていなかった。そこで、この構想の実現に注力することなどを目的に、東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（以下、U-PARL）が設立された。U-PARL では活動の一環として研究資源のデジタル化を行っている。本稿はその概要に

ついて紹介するものである。

2. U-PARL の活動の概要

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）は、公益財団法人上廣倫理財団の寄付を得て、2014年4月に附属図書館に設置された研究部門である[2]。第一期（2014年4月～2019年3月）は、①アジア研究図書館構築支援を中心に、②アジア研究、③人材育成と社会還元（第一期の成果の一つとして[3]を上梓した）を実施してきた。また、2019年4月に始まった第二期（2019年4月～2024年3月）では、①協働型アジア研究拠点の形成、②研究図書館の機能開拓研究、③人材育成と社会還元、④アジア研究図書館の構築支援、をミッションとして活動を始動させたところである。

現在、専属の研究スタッフとしては、特任准教授1名、特任助教1名、特任研究員5名が所属しており、いずれもアジア関連の研究者である。その学問分野は、言語学、文学、美術史、哲学、歴史学、書誌学、文献学など多岐にわたっており、研究対象地域は広く、東アジア、東南アジア、南アジア、中央ユーラシア、西アジアにまたがっている。このように多様な領域を扱う研究者が集ってはいいるが、全員に一貫しているのは、アジアに関する人文系の研究者であるという点である。

^{†1} 東京大学
The University of Tokyo

3. U-PARL が実施してきた研究資源のデジタル化

3.1 Flickr を利用した研究資源の公開開始 (2017 年 5 月～)

U-PARL が設立された 2014 年度は、アジア研究図書館に配架することになる研究資源の選書を行うとともに、購入に努めた。購入した研究資源には、「漢籍・碑帖拓本資料」が含まれており、第一期はこれらの研究資源のデジタル化が計画された。だが、U-PARL のスタッフは人文系の研究者であり、サーバ構築に関するノウハウを持ち合わせていなかった。また、東京大学の各部局で管理運営しているデジタルコンテンツのアーカイブ化や基盤構築を支援する事業が企画されていたものの、当初は準備期間であった。

このような状況下で、U-PARL では無償版の Flickr を利用して画像の公開を行うこととした。Flickr での画像公開はその手軽さが売りではあるが、東京大学で構築予定の全学的なデジタルアーカイブ基盤への移行を想定し、資料の高精細写真の撮影、メタデータの構造研究、メタデータ付与、書誌情報と Flickr のファイル構造との対応、画像の二次利用条件の策定など、検討すべき課題が多かった。様々な項目について度重なる検討が必要となり、準備までに 3 年ほどの期間を要し、ようやく 2017 年 5 月に、U-PARL で購入した『北路紀略四巻』等の画像を含め、資料の JPEG 画像にクリエイティブ・コモンズの表示-非営利-継承 4.0 国際ライセンス (CC BY-NC-SA) 相当のお願いをつけて、Flickr 上で公開するに至った[4][5]。

Flickr で公開をしたコンテンツは、最終的には、U-PARL 購入資料 4 点のほか、総合図書館所蔵書 16 点を含め、合計 20 点の資料、約 2,000 枚の JPEG 画像となった。また、20 件の資料のそれぞれに対してメタデータを作成し、これについても公開している[6]。

3.2 IIIF を利用した研究資源の公開開始 (2018 年 9 月～)

U-PARL が Flickr で画像公開を開始する直前の 2017 年 4 月に東京大学学術資産アーカイブ化推進室が設置され、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業[7]が本格始動し、2017 年 12 月に「東京大学学術資産等アーカイブズリンク集」[8]が公開され、それと同時に公開基盤システムを持たない部局への支援も開始された。U-PARL はこの支援を受け、2017 年より行なっていた Flickr を利用した JPEG 画像の公開と並行して、「漢籍・碑帖拓本資料」の IIIF 画像の公開を 2018 年 9 月より開始した[9]。その際、画像の二次利用については、東京大学総合図書館の提示する「利用条件：画像データ等の利用について」[10]に従い、「CC BY」(クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス) 相当の条件に変更した。

その後、2019 年 6 月には「東京大学学術資産等アーカイ

ブズポータル」[11]が公開され、本ポータルから U-PARL の提供する「漢籍・碑帖拓本資料」も検索されるようになった。

3.3 Flickr を利用した研究資源の公開終了 (2019 年 3 月末)

Flickr で JPEG 画像を公開するとともに、東京大学学術資産等アーカイブズで IIIF 画像を公開する試みは、多様な利用者に対応するという点で意義深いものであるものの、2 種類のアーカイブズを維持するのは、コストの面で最良の策だとは言えなかった。そのような折、Flickr の利用条件が変更され、無償版の Flickr では「漢籍・碑帖拓本資料」の公開が難しい状況となった。そもそも、全学的なアーカイブズへの移行を目指し、そのための準備として Flickr での公開を進めていたこともあり、2019 年 3 月末をもって「漢籍・碑帖拓本資料」の Flickr での公開を終了させることとなった (Flickr 公開の終了を巡る評価については[12]を参照)。

4. U-PARL から発信する研究データ公開の意義

4.1 画像公開を軸とした書誌情報とアノテーションの提供

図書館が「情報の保存と提供」を行う場であるならば、そこで扱われる媒体は紙に縛られるものではないだろう。時代を遡れば、パピルスや粘土板も情報を記録した媒体であり、現在ではデジタルが主要な媒体となっている。実際、大学図書館はリポジトリを活用して紀要等のデジタル化と公開を行い、オープンアクセスを実践してきた。だが、現在、オープンデータ化への対応が図書館にも期待されており、新たな知が求められている (このような課題を含め、新しい図書館のあり方を考えるためのシンポジウムとして、U-PARL では[13]を行った)。

図書館におけるこのような状況において、これは結果論ではあるが、U-PARL は恵まれた環境に置かれている。というのは、紙媒体を中心とした研究資源の現物とそれに対する書誌情報を持つ図書館という場所に、研究資源の中身を読み解くことを生業とする研究者が図書館に所属することにより、「書誌情報 (メタデータ)」と「アノテーション」の両方を提示するデジタル化の実践が可能となったからである。

U-PARL が行った「漢籍・碑帖拓本資料」のデジタル化では、公開した画像そのものが研究データであるが、研究者が必要とする深いレベルの書誌情報をメタデータと称して公開しており、これも研究データの公開事例となる ([6]を参照)。また、IIIF 画像を公開したことにより、コンテンツそのものに対するアノテーションの付与が容易になった。U-PARL では、IIIF 画像へのアノテーション付与を中心と

した研究を現在推進しているところである[14][15].

OPAC 記載レベルの書誌情報に留まらず、研究者が必要とする深いレベルの書誌情報や、研究資源のコンテンツに関するアノテーションを付与する作業を図書館から発信していくができるという点で、研究者が図書館に集う意義は実に大きい。

4.2 知の結節点としての「研究図書館」

2で記したように、U-PARLのスタッフは学問分野、研究対象の時代・地域・言語を異にしており、それぞれの個別の学問領域では顔を合わすことのないであろう研究者達が、一堂に介してプロジェクトの遂行に従事している。これも、アジア全域を対象とするアジア研究図書館の構築支援というタスクがあったからこそ、生まれた良縁である。これに加え、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業が図書館を軸に展開されていることもU-PARLの活動に勢いを与えてくれている。

U-PARLでは、デジタルアーカイブズ構築事業を先導する情報学の研究者と共同で、「漢籍・碑帖拓本資料」の研究に加え、あらたに『水滸伝』のデジタル化とアノテーション付与の研究を開始した[16]。『水滸伝』のデジタル化研究は、文学、書誌学、文献学、美術史、情報学など、分野を異にする研究者が協働で作業を進めており、従来とは異なる新たな研究データの提供が期待される場所である。

繰り返すが、このような協働型研究の実施が可能となっているのも、知の結節点たる図書館の地の利が有効に働いているという点と、研究者が図書館に所属して研究を行っているという点が極めて大きい。そして、研究者の協働研究を支えている図書館員の理解と支援にも多くを負っている。2020年度に開館が見込まれている東京大学アジア研究図書館は、その名の通り、研究者が内部に属し、研究を発信する図書館を目指している ([1]を参照)。

5. おわりに

オープンデータ（研究データのオープン化）への対応という点で、現在、大学図書館は大きな課題を突きつけられている。しかしながら、この現状をより深刻に受け止めるべきは図書館ではなく、研究者自身ではなかろうか。研究データの多くは研究者が作成・保存しているものであるから、研究者は、ユーザーの立場として図書館と向き合うだけではなく、「情報の保存と提供」に関わる主体として、図書館と協働することが重要となってくるように思われる。

図書館所属の研究部門として、図書館から情報を発信していくという点で、U-PARLの活動は極めてユニークなものであり、ミッションの達成に向けて、今後も努力を続けていく所存である。

参考文献

- [1] “東京大学アジア研究図書館”. <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/asialib/>. (参照 2019-07-09).
- [2] “アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL)”. <http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/>. (参照 2019-09-09).
- [3] 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL) 編. 世界の図書館からーアジア研究のための図書館・公文書館ガイド. 勉誠出版, 2019.
- [4] “【報告】 アジアンライブラリーカフェ no.002 古典籍 on flickr!～漢籍・法帖を写真サイトでオープンしてみると～”. http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/report_cafe2/. (参照 2019-07-09).
- [5] 富澤かな, 木村拓, 成田健太郎, 永井正勝, 中村覚, 福島幸宏. デジタルアーカイブの「裾野のモデル」を求めてー東京大学附属図書館 U-PARL 「古典籍 on flickr!～漢籍・法帖を写真サイトでオープンしてみると～」報告. 情報の科学と技術. 2018, 68 巻 3 号, p. 129-134.
- [6] “【DIGITAL LIBRARY】 漢籍・碑帖拓本資料”. <http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/kanseki-hijo/>. (参照 2019-07-09).
- [7] “東京大学デジタルアーカイブズ構築事業”. <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/contents/archives-top/>. (参照 2019-07-09).
- [8] “東京大学学術資産等アーカイブズリンク集”. <https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dalink/>. (参照 2019-07-09).
- [9] “東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 U-PARL 漢籍・碑帖拓本資料”. <https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/uparl/page/home/>. (参照 2019-07-09).
- [10] “利用条件：画像データ等の利用について”. <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/reuse/>. (参照 2019-07-09).
- [11] “東京大学学術資産等アーカイブズポータル”. <https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/>. (参照 2019-07-09).
- [12] 岡田一祐. 東京大学附属図書館アジア研究図書館・漢籍・法帖資料の Flickr 公開停止に触れて. 人文情報学月報, 第 91 号【前編】, 2019 年 2 月 28 日.
- [13] “【報告】 第 3 回 U-PARL シンポジウム：むすび、ひらくアジア 3 「図書館をめぐる知の変革」”. <http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/http-u-parl-lib-u-tokyo-ac-jp-archives-japanese-sympo2018-report/>. (参照 2019-07-09).
- [14] 中村覚, 成田健太郎, 永井正勝, 富澤かな. U-PARL における漢籍・碑帖拓本デジタルアーカイブの試作と研究利用. 人文科学とコンピュータ, 2018, CH-116(5), p. 1-8.
- [15] 中村覚, 成田健太郎, 永井正勝. Linked Data 化した典拠データと IIF を用いた法帖の異版比較支援システムの開発. 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, 2018, Vol.2018-No.1, p. 297-302.
- [16] 上原究一, 永井正勝, 中村覚, 中尾道子, 近藤隼人, 荒木達雄, 蓑輪顕量. 図書館における木版本のデジタル化と利活用の可能性ーIIF と TEI を用いた『水滸伝』諸版本のデジタル化を通じてー. 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, 2018, Vol.2018-No.1, p. 381-388.